

# 万葉恋歌抄

其 一

森 本 治 吉

一

今は昔、ちようど十年ほど前、歌誌「白路」に、万葉恋抄といふ、恋歌の評釈ものを四、五年連載して好評をいただいでゐたことがある。この度、「上代文学」が機構を新にして出版するにあたり、純粹に学理的な固い文章だけでなく、読者の気安く取りつき易い読み物がちよつぴり加はつてゐた方がよくはないかといふ話になつて、以前の続稿を連載せよといふ編集部が下つたわけである。唯森本自身の反対論として、それを毎号載せると自分の研究ものを下さうとしても、一雑誌に同一筆者のが二篇も出るのは不都合だといふことになるから連載物を書くのは嫌だといふ意見を出した。だが、しかし、前非難に対しては、五味智英理事が少しも騒がず、この中でさういふ格の下つたものを書くとすれば森本さん以外に居ないはずだから、森本さんにその点を充分注意してもらつたらいいだらうと述べたので、この信濃の山人の心臓で押し切られてしまひ、後者に対しては、森

脇・竹内理事から、両方載る場合があつてもかまはないといふ意見が出て、それでどうやら載るやうになつたものである。

唯見れば何の苦もなき……で、こんな鑑賞文みたいな文章でも、何しろ万葉には異説が多いから、先進の説を充分に比較判断してからでないといふ失敗をやる。その苦勞は所謂學術論文も同一である。違ひはただ、調べた過程を生のまま書いてしまふか、調査はおほむね隠して結論だけを文章に表はすかの差で、勞苦に違ひはない。その上こちらは、表現を柔かく苦心したりせねばならぬし、これはこれで又何かと苦勞のかかるものである。

一

更に又、執筆の辛勞といふ問題のほかに、かういふ文章の効用とか価値とかは、改めて根本的考察を加へてみる必要があるのではなからうか？

といふのは、右のやうな感想を温めてゐるうちに私は、鈴木成高氏の「歴史家トインビー」といふ文章を強く想起したからである。

それは数年前日本に來た、アーノルド・トインビー氏に対する諸家の批評集の一つとして鈴木成高氏の書かれたものだが、そこで、トインビー氏に在つては、歴史の中に歴史事実の細かい調査以上のものを見る。つまり、史実の中に、人間を・社会を・人間のパターンを・そして場合によつては神を發見しようと努力し、それを見出

して現代の我々との関係を考察することに、歴史研究の根本の価値を見出さうとすることがこの学者の特色だと説いてある。そして普通の歴史学者との相違対決を論じてある。このことを、私は強く想起した。

彼にとつて、歴史は最初から知るための歴史でなく、生きるための歴史であつた。知的興味ではなく、生の対決であつた。こうしたトインビー史学の性格は、実はこの半世紀来マイネッケやトレールチなどによつて問いつづけられてきた歴史主義の問題にかかわつてくるものであることも見逃がされてはならない。

ランケ以来、歴史とは「本来どうであつたか」(Wie eigentlich gewesen ist)と云うことを、「ただそれだけのものとして」(als solches)「それ以上の目的を持つことなしに」(Ohne weiteren Zweck)探究するものであつた。それが歴史主義の立場であつた。今日の利害は、過去審判する基準であつてはならない。過去は過去のために聖化さるべきであつて現在に隷属さるべきではない。このような立場において、歴史学はその純粋性と厳密性と自主性を確立しえたものと信じた。しかしそうすることによつて歴史は生から遊離せざるをえなかつた。やがてしだいに死せる知識でしかないものになつていつた。歴史はわれわれの生にかかわることのない、あつてもなくてもいい知識となつてしまつた。こうして歴史的世界は切実な生の世界から断ち切られて、好事家の術学にまで頹落していつたのである。(中略)

歴史主義は現代を殺すことによつて過去を生かすものであつた。それは過去と現在とを切断することにおいて成立している。しかるにトインビーの歴史意識は、まさにそれとは反対に過去のすぎざらないことの意識である。トインビーにおける歴史とは、過去の現在することにほかならない。

この言葉は、現代の万葉研究者の多数に若干の反省を求める要素を含んでゐはすまいか？ 現代学者に多く好まれてゐる直接的語義の解説や、語法・用字の究明に専心することは、ただ知るために知る態度である。それも勿論必要だが、それだけが万葉研究の窮極でその先にはやることは無いとする考へと、それはむしろ出発点であつて、研究の最後のゴールはその先に在ると見る考へと、二つ有るはずである。

そして私などから見ると、前者だけをたどることは歴史学における歴史主義のコースと失落とに通ずるかと思はれる。そこでは、享受者や学者やと、万葉作家の息吹の交流が忘れられてゐはしないか？ 彼等自身の生が、研究にそのまま投影したり、万葉を読むことが、万葉作品と自分との生の対決になるといふ、幸福な状態が見失なはれてはゐないか？ 万葉といふ名の過去を現在に生かして、出来るだけ滋養を吸ふことの必要が、もつともつと重視されなくてはなるまい。

名古屋の先生や木俣修氏、又上代文学会の関係者中でも、自ら作歌する人々とは、しよつちゆうこのことを論じあひ語りあつてゐる。この恋歌抄などはかない文章ではあるが、さういふ役に立てばまことに幸甚である。

一体歌人は、万葉集を読むにも語るにも、臆ろ気ながら、かういふ欲求を以て享受してゐる。ただそれを自覚し、更にトインビーほどにその自覚を客観的に組織して訴へることをしないだけである。

では、それはそもそも誰の仕事だらうか？

我々がそれをやらないで一体誰がこの欠陥を埋めるといふのか？ この恋歌抄が、多少ともさういふ問題に役

立たんことを希求して、執筆をつづけるものである。

三

以前「白路」に書いた時は、十中八九作者不明の恋歌を主にした。今度は趣きを変へて、人麿以下の著名作家や貴紳の人々の作品から選ぶ。

各作家に分けて、その人の略伝から書き初めて、作品に及ぶといふことにしたい。

枕詞は（ ）のしるしでかこむ。比喩は〔 〕でかこむ。序詞は、\*のしるしを附ける。歌の番号は日本数字で、各巻の巻数はアラビヤ数字で表はすこと、近年の私の発表文章の通例に従ふ。

——以上、昭和三十六年四月二十五日記す。

倭 大 后

写本によると「太后」となつてゐる本もあるが、紀川本・古葉略類聚鈔に「大后」とあるのが妥当である。

古人大兄皇子（舒明天皇の皇子）の娘である。もとの名が倭姫王。長じて天智天皇の皇后に立たれた。大后は皇后のこと。この作者の万葉に出てゐる作品は長歌一首、短歌三首だが、すべて、天智天皇の薨去に関し、それを愛惜する歌だけである。つまり恋歌は恋歌だが死の恋歌といふことになる。人麿や旅人には、この死の恋歌が多

い。

尚、中皇命といふ女性の皇族の作品が短歌三首（110・111・112）ある。その中皇命が如何なる皇族か不明だが、この三首の全部、或は一部分の中皇命は、倭大后のことだといふ説を唱へる学者がある。しかし、まだ定説を得てゐないので、ここにはそれ等の歌を取り上げずにおく。

天皇、おほみかみ聖躬不な予たま之時、おほきさき大后の奉れる御歌一首

天あまの原もとふりさけ見れば大王おほきみの御寿みいことは長く天足あまたらしたり （214七）

この題詞の読み方は、現在の学者は殆ど一致して山田博士の万葉集講義によつてゐる。「聖躬」は、意味は大御身おほみみで、大も御も賞讃や敬意を示す言葉。「不な予たま」のヤクサムとは、不安とか違和の意で、身体に故障が生じて悪くなること。天皇は作者の背の君天智天皇で、天皇が亡くなられる直前に、その生命が盛大で充足していると歌ひ上げたもの。それに又この作歌の根底には言霊思想があつて、かういふ歌を詠むことで生命を振り興おこしめ得るといふ考へ方が含まれてゐるのである。

上二句は、広々たる天空をはるかに眺むれば、といふ意味。細かく言へば、「さけ」は「放け」で、「放け見れば」は近接せずに大きく遠望すること。

結句は「し」は敬語。「天に足らし」で、大空に充滿しておいでのになる、と言ひ切つた。「たり」はさういふ

断定の気分を示唆してゐる。そして、「長く」と冠らせてゐるから、さういふ状態が何時までも持続すると断言した趣きである。——ところが実状は反対で、今日明日にも急変が来るかも知れぬ有様で、事実と詩とは相反してゐる。

そこに、この歌が希求の詩たる意義がある。未開社会の言語の威力といふものは、これからさうなつて欲しい状態を、言葉として言ひ表はせば必ずさう変る、といふ信仰を伴つてゐるものである。この意味からは、事実が危篤といつた状態であればあるほど、反事実的な願望の言葉が発言される必要があるのである。これも、天皇の生活実状が本当に天空に充滿するほどの健康で明るい生命感に溢れてゐるなら、こんな歌など不必要であらう。それが、反対だつたために、この一首は重い不安感を漂よはせてゐる。詩歌としてはそこに得難い値打を包蔵してゐるとも言へようか。

ただし、語句の解釈に於て、守部は初二句を古代建築の構造に因ると解してゐる。さう見れば、右記のやうな鑑賞は霧散してしまふ。

これも次の歌もその次の歌も、恋情が中心になつてゐる。普通なら一首は華やかな気分になるわけである。だがそれに、死がからみ合つて死の恋歌となつてゐる。そのために、華やかさが消されて、沈痛な気分が主色となつてゐる。ただ、上句の気分が如何にも雄大なためもあつて、美事な太い線が一本通つてゐることは見失なはずに味はひたいものである。